



Title	関根達人発表に対するコメント：考古学の立場から
Author(s)	越田, 賢一郎
Citation	182-185 新しいアイヌ史の構築：先史編・古代編・中世編：「新しいアイヌ史の構築」プロジェクト報告書2012
Issue Date	2012-03-31
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/56293
Type	report
File Information	pt3ch5.pdf



[Instructions for use](#)

第5章

関根達人発表に対するコメント ：考古学の立場から

越田 賢一郎

越田から関根達人先生の「出土資料から見たアイヌ文化の特色」へのコメントという形で、少しお話をさせていただきます。コメント用の資料に、「古代末から中世相当期の北海道の遺跡」から出土する遺構と遺物を並べておきました。また、「政治、経済的動きと北海道」について箇条書きにしておきましたので、私の話のメモがわりに見ていただければと思います。新しいアイヌ史の構築のために、どのようなことを考えたらいいのだろうか、ということをならべてあります。

私が40年前に考古学概説を習ったときには、住居、墓、古墳などの遺構についての概説があり、それから遺物について各論があり、さらにそれを組み合わせた年代の問題、考古学的方法論、集落論などが並んでおりました。ここ3・40年の間に、中世に相当する時期の北海道考古学はすごく進んでまいりまして、ようやく、そういう概論が書けるようになった気がしています。ですから、もし新しいアイヌ史の構築ということであれば、やはり北海道全体をとらえた1つの概論が必要だと思います。北海道大学アイヌ・先住民研究センターで作成していただけたら、すごく面白い仕事になるのではと思っています。

今日は資料について全部話しておりますと、1日たってしまうので、関根先生からお話があったいくつかの遺構や遺物についてふれてみます。まず遺構では、お墓についてです。墓からの出土資料は同時性を示しますので、これからも1つの重要なキーポイントになる資料だと思っています。他に生産遺構、祭祀遺構と書きましたけれども、それぞれ単独での研究はあるのですが、集落と組み合わせた形での研究がありません。これを今後課題にしていかなければいけないと考えています。

それから遺物ですが、鉄製品では北海道埋蔵文化財センターの三浦正人さんも昔から指摘されているように、本州で使われていた本来の用途で使われるだけではなく、北海道ではまったく別の用途に使われることがあります。たとえば、関根先生がご指摘されていたボタンとか古銭が当てはまります。アイヌの人たちはボタンやお金として使っていたのではなく、装身具に変えて使用していると思います。刀は、刀装具ごとに分解されて、それぞれが飾りとして利用されています。このような使用方法の問題を含みながら遺物を見ていかなければならないと思っています。

陶磁器については、関根先生が中世陶磁器から近世陶磁器まで通して研究されておられて、それを北海道の内国化と結び付けて考えておられます。今はサハリンまで追いかけておられるようです。サハリンに日本の陶磁器がどのように入ったのか、一方で中国の陶磁器もサハリンに入ってきていると思います。特に間宮林蔵の絵には明らかに中国の瓶子が書かれています。日本と中国、さらにロシアからの影響も考える必要があると考えています。

それから午前中にカムチャッカ半島南部の話がありました内耳土鍋については、サハリン南半からも出土します。これらの地域の内耳土鍋が鉄鍋とどのような関係をもって出てくるのか、これも大きな問題だと思っています。

それから私が取り組んできた鉄鍋があります。煮炊具が土器から鉄鍋に変わる、そして火処がかまどから囲炉裏になるという変化も大きな問題だと思えます。

生産用具としての骨角器では、アイヌ独特のキテがあります。これまでも様々な研究が行われてきましたが、縄文時代から続縄文文化、オホーツク文化を経て、アイヌ文化にどのように変遷していくのかが大きな問題だろうと思っています。

そして、今日取り上げられた漆器の問題があります。木製品もそうなのですが、残りにくいものなので非常に研究しづらい面があります。ただ、漆器ですと膜が残りますから、その分析ができるので、本州での生産地が分かってくると面白いと考えています。

布や繊維製品は本当にわずかしかなかったりませんが、余市町大川遺跡の金糸の研究がされています。これからも有機物の遺跡が残った場合は、こういった研究が進んでいくのでしょうか。

一方で、縄文時代からの伝統の石器があります。ドングリやクルミを割るためのたたき石と台にする石、それから錘にする石がよく出土します。これらは、本州の民家跡を掘ってもかなり出てくると思えますので、アイヌ文化の特色と言えるかどうかかわからないのですが。北海道に特徴的なのは火皿で、火打ち石と合わせて喫煙風習と関連します。北方の石製ランプともつながっていくものだろうと考えられています。

関根先生や私が重要なものとしてとらえているのがガラス玉です。関根先生が北方での出土例を挙げられましたが、東北北部と北海道だけに集中しております。ガラス玉はアイヌ文化では首飾り、胸飾りなどの装身具として使われています。このほかの装身具には、コイル状鉄製品、腕輪、そして耳飾り（ニンカリ）があります。先ほど紹介された「Ω」形のもの、円環状のもの、そして下にガラス玉や石の飾りが付くものなど、形態がいろいろあります。

これらの出土遺物一つ一つについて、北海道で1つの編年を作り上げるのが大きな仕事になると思えます。こういった昔ながらの編年作業の一つ一つの遺物について行い、時期ごとの「もの」の組合せを明らかにすることが必要です。それを年代測定と合わせて、それも単品だけの年代測定ではなく、何例も組合せて年代をきめていく作業を行います。先程の、厚真町から出土した銀製円盤がつけられた九曜紋付き矢筒の例では、単独ではいつのものなのかわかりません。それを他の遺物との組合せの中で理解して、更に年代測定と合わせて年代を推定していくことができます。

これまでの研究では、ここで話したような遺構や遺物について、出土した遺跡の性格を明らかにし、遺跡のどこから何が出ているのかという集落研究の面が遅れているのではないかと思います。縄文時代の遺跡ですと、1つの集落像があって、その中の住居と墓の配置などから土地の利用方法を、遺物の時代差などから時代による集落の変化の様相を明らかにできるようになっています。ところが、アイヌ文化期については、住居、墓、鉄鍋、漆器、ガラス玉などの遺構や遺物は、まだ単品で研究されているだけの気がします。これが総合化できて、初めて「アイヌ史」の構築ができるのではと考えています。

そこに至る過程として、たとえば送り場ですと、その遺構が精神性を表しているかどうかを、

どう判定していくのかが問題になります。ただ同じものを集めているだけでなく、どのような集め方をしたかがわかれば祭祀行為と言えるのか、きちんとした基準を作っていかなければいけないと考えています。

その時に、北海道というこの広い土地をもう少し地域分けして考えなければいけません。特に道南部の状況は複雑で、北海道の擦文式土器が青森に入り、青森の土器が北海道に入りといった交流を繰り返している場所です。そして、道南部に館ができるような時代になっても、そこにアイヌの人たちと同じ墓制の人たちが葬られる状況があります。イタリアのイエズス会宣教師のアンジェリスの報告には、アイヌの人たちと和人の葬制がはっきり区別されていると書いてあります。

私は、東京駅周辺からみつかったキリスト教徒の墓を見て、これはアイヌの墓と同じ形態だと思いました。一方が広くなった長台形のお墓に、伸展葬で葬られているのです。アンジェリスもそれに気付いてアイヌの墓に注目し、キリスト教徒と同様の葬り方をしていて、和人の葬り方と大きく違うのだと書いたのだなと思いました。ですから、道南部では文献と結びつけて、考古学的な遺構や遺物をとらえることも可能です。

一方、道東や道北では遺跡の発見が少なく、墓もまだ決して数が多くありません。それに対して近世のチャシの数は逆転しており、道東部と道北部が圧倒的に多くなります。チャシの年代差があるのか、といったことも考え合わせていかなければいけないのかなと思いますが、このような地域性をよく見極めていく必要があります。

そのうえで、その地域ごとに古代から中世というよりは、縄文、続縄文からアイヌ期までの変遷をたどる必要があると思います。なぜかというと、擦文文化は、実は借り物の文化である、という気がするからです。7世紀頃、律令国家的な文化と東北の蝦夷(えみし)の文化が合わさって北海道に入ってきます。北海道の人たちは、住居、カマド、鉄器類、それに坏や壺といった生活用具などを、丸ごとに近い形で取り入れているのです。これは中世に擦文文化期からアイヌ文化期へ移り変わる時に、鉄鍋、漆器は受け入れるが、陶磁器はほとんど受け入れていないように、本州のものを使いながらも、それを選択して受け入れて、独自のアイヌ文化を築いていくのとは大きく異なると思います。

私は、ここでアイヌ文化期という言葉を使っていますが、それはあえてアイヌ文化というのが成立していく時期の文化という形で使いたいと思っています。擦文文化の受け入れ方とまったく違うのは、そこに今日のテーマである民族のエスニシティーの形成を考えていいのではないのでしょうか。

「政治、経済的動きと北海道」については、簡単に触れておきます。平泉文化との関連について一つお話しておきます。関根先生の穂香堅穴群とポンマ遺跡のガラス玉のスライドに、小さな方形の金属製品が写っていました。私がびっくりしたのは、中尊寺の讚衡蔵に棺から出土した金と銀でできた「七ッ金」が展示されていたのです。材質は違うが同じものだと私は判断しました。「七ッ金」は、刀子の金具とされていますが、それが首飾りに転用して使われたこととなります。

本州の文化が北海道に入る時、祭祀行為に使われていたものをすべて受け入れることは難しいのですが、それが一つ一つの行為に使われたものに分けられると、アイヌ社会の中により受け

入れやすくなったのではないのでしょうか。漆器が重要視され、陶磁器が受けられ入れなかったのは、漆器が古い段階で交易時の儀式に用いられていたために、それを継続して用いていたためと想像できます。本州の文化との接触の中で、儀式や祭祀の場で使われていた「もの」を、北海道で新たに組み立てなおして、新しい価値観を付与して使用したのではないのでしょうか。たとえば、刀は分解して、刀身や鍔に新たな鞘や柄、さらに刀紐を取り付けて組み替えて使用し、鍔、切羽、刀装小物などは装身具に用いています。組み替えた刀は、アイヌ社会で祭祀や儀式の際に重要なものになっています。これがアイヌ文化の一つの面なのではないのかと、私は思っているところです。

先ほど、コシヤマインの時期を境にして前後の和人との関係に大きな変化があるという話がありました。まさに、交易形態がどうなのか、そして交易に結びつく社会形態がどのように築かれているのか、それを明らかにしていくことが北海道の中で、1つの重要な視点になっていると考えています。

最後になりますが、北海道の文化を考える時に、サハリンや千島との関係だけでなく、西洋文化との直接の接触、または中国を介しての西洋文化との接触も考えなければなりません。

西洋の探検船や宣教師が来て、北海道に何を置いていったのでしょうか。1つはたばこだと思います。たばこ文化は、江戸初期には確実に入っていますが、本州以前に入っている可能性があるかもしれません。もう1つは銀です。オランダのM. G. de フリースの1643年の記事の中に、銀に注目して書いています。当時メキシコで銀が採れましたから、注目されていたのでしょうか。そのおかげで、アイヌの人たちが銀の装身具を相当使っていたということが分かりました。さらにもう1つはガラス玉です。フリースは、持ってきたガラス玉をアイヌの人々との交換に使用しています。直接的にヨーロッパのオランダ玉などが入っていると思われます。装身具の変遷のなかで、突然かけ離れたものが出現する場合があります。

このようなことを考えながら関根先生のお話を伺っておりました。一つ一つのことを積み重ねて、全体として新しいアイヌ史を考えていかなければいけないだろうと思っています。あまりまとまらない話で申し訳ありませんが、これで終わらせていただきます。